231453 231453 231453

久保田正文

作家論

永田書房

著者略歴　久保田正文（くぼたまさふみ）　1912年長野県飯田市に生る
1938年東京大学文学部美学美術史学科卒業
現在大正大学文学部教授
主な著者「評伝石川啄木」（実業之日本社）「人物叢書正岡子規」（吉川弘文館）「百人一首の世界」（文芸春秋）「現代短歌の世界」（新潮社）「石川達三論」（永田書房）「芥川龍之介その二律背反」（いれぶん出版）
現住所　東京都大田区南馬込5—18—24

作家論

昭和五十二年七月一日　印刷
昭和五十二年七月十日　発行

定価二、八〇〇円

著者　久保田正文
発行者　永田龍太郎
発行所　株式会社　永田書房
東京都中央区京橋三ノ六
電話（二七一）四八五七
振替（東京）九七六〇八

印刷　東洋印刷㈱
製本　明興製本工業㈱

＊落乱丁本はおとりかえします

© 1977 Masafumi Kubota　Printed in Japan

作家論　目次

国木田独歩……七
石川啄木……二三
島崎藤村……三九
正宗白鳥……五四
志賀直哉……六五
武者小路実篤……七五
有島武郎……八二
中　勘助……九二
豊島与志雄……九八
葉山嘉樹……一一五
中野重治……一四〇
小林多喜二……一九二
山本周五郎……二一六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

伊藤　整……二二四
高見　順……二四二
宮本百合子……三〇〇
佐多稲子……三一六
壺井　栄……三三四
岡本かの子……三四二
平林たい子……三四六
円地文子……三五〇
瀬戸内晴美……三六二
臼井吉見……三八四
藤枝静男……三九三
田中英光……三九九
野間　宏……四〇四

梅崎春生……四二九
椎名麟三……四三四
堀田善衛……四三七
長谷川四郎……四五一
三島由紀夫……四六五
安岡章太郎……四七三
立原正秋……四八七
大江健三郎……四九六
北杜夫……五〇一
丸山健二……五〇七
あとがき……五一二

作家別略歴及索引作成　永田龍太郎

作家論

国木田独歩

国木田独歩と石川啄木

芥川竜之介は、「文芸的な、余りに文芸的な」のなかでつぎのように書いている。

〈独歩は鋭い頭脳を持ってゐた。同時に又柔かい心臓を持ってゐた。しかしそれ等は独歩の中に不幸にも調和を失ってゐた。従って彼は悲劇的だった。二葉亭四迷や石川啄木も、かう云ふ悲劇中の人物である。〉

中野重治は、「啄木に関する断片」のなかでつぎのように書いている。

〈明治の詩人中私の胸に特にしばしば往来する一系列の詩人がある。北村透谷、長谷川二葉亭、国木田独歩、石川啄木。〉

もっとも、「啄木に関する断片」は、大正十五年十一月発行の『驢馬』に発表されたものであるから、芥川竜之介の文章よりは、ほぼ半年ちかく前のものである。さらに細かな点について言えば、北村透谷をこの系列に含めるかどうかという点で二人の間にちがいがあり、芥川は三人を〈悲劇中の人物〉として概括しながらも、二葉亭にやや性格の異った〈悲劇〉を観ている。中野重治は、四人を概括する視点をどこにおいているかといえば、つぎのごとくである。

〈彼らを他の明治詩人から区別するところの彼らに共通の特徴は、彼らが単に完成する芸術を創ることそのこと（いうまでもなくかようなものは事実ない。）を目ざさずして、直ちに人生の全般的考察を目ざした点に、そのために彼らが物質的にも精神的にも幾多の苦悶を経て薄幸におわった点に、しかもそれらすべてにかかわらず、彼らが未完成のままに残した多くの仕事が、矛盾と焦躁と動乱とのなかに住む我々の胸に幾多の考うべきものを与えずにはおかない点にある。〉

つまり、大正の終りの年、あるいは昭和のはじめの年のほとんどおなじころに、死を目前に予感していた三十五歳の文学者と、彼が期待をよせていた二十五歳の青年文学者とは、ほとんどおなじ理由で、あれらの明治の文学上の先輩のことをかんがえていたということになる。

それからさらに五年くらい経って、唐木順三は、『現代日本文学序説』において、日本自然主義文学との関係で独歩と啄木とを論じた。

独歩は、〈透谷の流れを汲むロマンティシスト〉である

と唐木は観ている。そういう独歩は、自由なる自然を文学のなかにもった最初のひとであり、彼の自然の観念は、日本自然主義がそれによったフランス自然主義の流れに立つものではなく、ワーズワースの道をとるものであり、それは〈自然を素朴的に人間に対置する〉ものであり、〈この自然と人間の関係を無限と有限、永遠と時間、壮大と虚無との関係に於て歌う。この両者をつなぐ運命、驚異、生命の神秘が問題にされる。独歩は、自然へ向って人間を解放した。人間を屋根の下に見ずして大自然の一点景として見た。この独歩の自然観は、日本の近代文学史上に於ける一大功績となすに足るであろう〉。日本の自然主義は、封建的なるものに対する反動として起り、旧道徳否定に進んだ。独歩は、こういう自然主義の中心から外れて独自の位置を占める。彼は封建的なるもの、社会的なるものいっさいをあげて直接に、素朴に、自然に対立させている。一般の文学史が、独歩を便宜的に自然主義のなかに編入するような見解にはとうてい同調しがたい、とも唐木順三は言っている。

自然主義が旧物破壊の段階を通過して、やがてありのまま肯定、無理想・無解決主義へ陥ったとき、啄木は、「きれぎれに心に浮んだ感じと回想」ならびに「時代閉塞の現状」によって、それへの徹底的な批判者としてあらわれた。そこにおける啄木の自然主義に対する関係は、あたかもフォイエルバッハを批判したときの『ドイッチェ・イデオロギイ』の理論との関係を思わせるものがある。〈自然主義者が老い疲れて歴史の面から隠居していったとき、「食うべき詩」の作者石川啄木が、この過ぎていった陣の中から現われた。自然主義者への下からの宣戦が始められ、自然主義は全く二十六歳の啄木の前に光を失った〉。啄木の実現したのは、〈自然主義の全き止揚であり、プロレタリア文学へのはるかなる示唆である〉。

唐木順三が、自然主義との関係において位置づけた独歩と啄木とは、ほとんど直線的につらなっているだろう。それは、芥川竜之介が気づき、中野重治がかんがえていた関連を、理論的にまた文学史的にくわしくしたことでもあった。

明治文学史について、紅葉・露伴―鷗外・漱石―自然主義文学―白樺派の流れを中心として、透谷―二葉亭―独歩―啄木という系譜を対照的につくるということになれば、いささか図式的に整理されすぎて異論が出るかもしれぬが、すくなくとも国木田独歩と石川啄木とは、その文学の内面的性格においてかかわりをもつものであるということは、ほぼ一般的に承認されうる系譜となったとみることができるだろう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

生涯について

国木田独歩の生涯をたどるものにとって、見のがすことのできぬ二つのことがある。出生にからまるアクシデントと、佐々城信子との関係である。

いわゆる、独歩出生の秘密については、これまで多くのひとの調査や穿鑿や研究や解釈やが入り乱れたが、猪野謙二がそれら諸説をめんみつにたどったうえで、〈結論的にいって、この「独歩の秘密」はまだ解かれてはいない、とみるのが至当であるように思われる。〉とのべている（「独歩評伝」―『明治の作家』所収）のに私も同感である。

独歩の生れは、旧暦明治四年七月十五日（太陽暦八月三十日）として一般に年譜はしるしているが、このデートにさえも疑問は出ている。水田九八郎『国木田独歩文学辞典』（昭和三十四年十一月刊）ではつぎのように整理して紹介している。

1　明治四年七月十五日（竜野戸籍、現在ではこれが定説になっている）。

2　明治四年七月九日（岩国小学校学籍簿、弟収二も同説）。

3　明治四年十一月十日（銚子戸籍）。

4　明治〇年八月十二日（「唯暗を見る」の記載によるもの）。

3の、銚子戸籍というのは、前田重が「独歩の秘密」（『展望』昭和二十二年五月号）ではじめて紹介した、千葉県海上郡新生村、淡路家旧戸籍の記載とも一致している。4の、「唯暗を見る」は、明治二十九年夏京都滞在中に執筆のものと推定されるエッセイである。信子との関係の破壊されたのちの絶望的心情をうかがわせるもので、〈アア、苦む者もわれ、これ嘲る者も吾れ。実に望ましきは阿片ぞかし、もしくはピストルぞかし。何故にわれ明治〇年八月十二日に生れしぞ、何故に去年六月九日に彼女を得しぞ。……〉と書いている。

昭和二年四月に、改造社から『現代日本文学全集』第十五編・国木田独歩集が出たとき、巻頭に「国木田独歩小伝」を書いた旧友柳田国男においては、出生についての疑問はまったくあらわれていない。昭和十七年十一月に、坂本浩の著『国木田独歩』が刊行され、右の〈明治〇年〉を明治二年とかんがえるという説を発表したことから、出生問題についての厄介な問題があらわれはじめた。なぜならば、独歩がいつうまれたかというデートの問題には、独歩の父は誰か、という問題がからむことになるからである。

播州竜野藩士国木田貞臣（通称、専八。天保元年―一八三〇―生）は、幕末のころ竜野藩脇坂氏のもとで〈軍艦指

図役支配〉という役についていた。明治二年九月十五日には、竜野藩の〈史生〉という役についている（桑原伸一「国木田独歩と山口県」『文芸山口』四十三号・昭和四十年十月刊―による）。彼は、慶応四年（明治元年）九月（坂本浩説）か、明治二年三月（塩田良平・野田宇太郎説）か、明治四年七月（前田重説）かのいずれかの日に、銚子沖で遭難した舟に乗っていて、救けられて銚子港に上陸した。ことによると、専八じしんは船に乗っていたのではなく、藩の船が遭難した報せをうけて、銚子へ急行したのであるかもしれない（野田宇太郎「竜野の噂」）とも言われる。その船の名は、〈竜神丸〉か、〈竜野丸〉か、〈美加保丸〉かであった。

国木田専八は、銚子の吉野屋旅館に止宿した。その旅館に淡路まんという女中がはたらいていた。やがて専八とまんの間に子供ができ、うまれたのが男の子で、亀吉と名をつけた。しかし、専八には竜野に妻子がいるので、亀吉をじぶんの子供として入籍することができなかった。そこで亀吉は、淡路まんの死んだ夫雅治郎（または権治郎）との間の長男ということにして入籍された。明治九年になって専八は妻とくを離籍し、淡路まんと結婚し、亀吉は養子として専八の籍に入った。

坂本浩は、慶応四年に銚子へ流れついた専八が、まんと知りあって、子供がうまれたのが明治四年というのは時間的にへだたりがありすぎて不自然だということ、語りつたえられる独歩の少年時代の行跡などに照すと、二年くらい年長とみるのがしぜんであるということなどから明治二年出生説をとるのである。前田重は、淡路家の旧戸籍や、独歩の異母兄弁三郎（専八と先妻とくとの息子）の未亡人はるの談話、淡路三之助（まんの兄善太郎の息子）の談話などを綜合して、坂本説を大きく訂正し、〈率直に言えば氏の臆断は後人を誤まらしむる虞なしとしない〉としつつ、亀吉の出生は戸籍記載どおり、明治四年七月十五日とかんがえ、亀吉の父は雅治郎であると断定した。雅治郎は、坂本説のごとく、土地の不良破落戸ふうな男ではなく、米穀商人であった。国木田専八が銚子へ流れついたのは、竜野の関係者の談話から綜合して、明治四年七月十四日以後でなくてはならぬ。亀吉が、専八―まんの子ということにはなりえないとかんがえた。

ところが、その後昭和二十八年、福田清人らが、銚子の田中玄蕃の記録を発見して、明治二年三月十五日には、国木田専八が銚子にいて脇坂家（播州竜野藩主）の用船のための金策に奔走していたらしいというデータをあげて前田説に反論し、野田宇太郎もおなじ意見をとなえた。そうするとまた、山口県在住の独歩研究者小川五郎や、神戸の宮

崎脩二郎やから現地の資料をつかっての前田説支持があらわれるかとみていると、もっとも新しい桑原伸一説（前掲誌）などは、明治二年八月十二日出生・父専八説ということになっている。

思わず、亀吉（独歩）出生問題について深入りしすぎた観があるが、さらに多くのひとの発言にふれて細かく説明しはじめるときりがないのである。細かくなればなるほど、推論の過程にかならず盲点があらわれる。坂本説、前田説、福田・野田説などの代表的なものにおいても、ひとつか二つは飛躍しなくては結論に到達しないところが出てくる。やはり、猪野説のように、〈「独歩の秘密」はまだ解かれていない。〉あるいは、これ以上解くことのできないものに属するのではないか？

昭和二年に「国木田独歩小伝」を書いた柳田国男は、昭和三十四年になってつぎのように書いた。

〈その生れについてはいろいろ伝説めいた噂が伝はってゐるが、私は独歩とつき合うやうになってからも、そんなことをきいたこともなければ、先方から説明したこともなかった。作品の「運命論者」の材料になるやうなことがあったとか、なかったとか、詮索する向きもあるが、私には興味はない。〉（『故郷七十年』）

中島健蔵は、昭和三十八年にあたらしく書いた「国木田独歩の人と作品」でつぎのように言っている。

〈わたくし自身は、独歩の作品の理解について、彼の出生の問題にこだわりすぎることは、益がないと考える一人である。逆に、彼の作風から考えて、独歩が自分の出生の秘密にひどくなやんだと推定するほうがかえって不自然であると考える。〉（『近代文学鑑賞講座』第七巻）

独歩の人生にとって、その感情と思想にとって、より大きな力ではたらきかけたのは、出生の問題であるよりは佐々城信子とのかかわりと観るべきであるかもしれない。明治二十八年六月九日から、翌年四月二十五日までの短かい月日のあいだで、邂逅―恋愛―結婚―離婚の全コースを通り過ぎた。

いま、ここではしかし、誕生から一足跳びに結婚生活に入るわけにもゆかぬから、その間のあらましを年譜項目ふうにながめておきたい。

亀吉は、銚子で母まんに育てられていた。国木田専八はやがて東京へ出て下谷徒士町（おかち）脇坂藩邸に住むことになり、明治七年にまんと亀吉もよび寄せていっしょに生活をはじめた。明治八年から司法省につとめていた専八は、翌年三月に山口県山口裁判所につとめることになり、それいらい一家は専八の任地の移るにつれて広島、岩国、再度の山口、

萩等に転住した。明治九年に、まんの連れ子として亀吉が国木田専八の籍に入ったことは前述した。亀吉はそれ以来、明治十一年に小学校へ入学し、明治二十年に山口中学の学制改革のために中途退学して上京するまで約十年間を山口県下で過した。

上京して、明治二十一年五月に東京専門学校英語普通科に入学し、翌二十二年九月に同校英語政治科に仮入学したが、間もなく英語普通科三年に転じた。幼名亀吉を、哲夫と改めたのは同年七月である。

明治二十四年はじめに、鳩山校長の排斥と英語政治科改革を要求して、ストライキを行ったが、結果は学生側が敗北し、国木田哲夫は三月末に退学した。五月に父のいる山口県麻郷村に帰って、秋には波野英塾をひらいたりしたが、翌年六月にはまた上京する。東京で民友社の仕事を手伝ったり、『青年文学』の編集に関係したりして、徐々に文筆活動がはじまるが、生活は苦しく、山口での父の退職も近づいているので自活の道をかんがえなくてはならぬことになり、徳富蘇峰の紹介、矢野竜溪の推薦で、竜溪の出身地である大分県佐伯町の鶴谷学館教頭として赴任するのが明治二十六年九月末である。青年教師らしい謙虚と昂揚をもって独歩はそのしごとを情熱的にはじめたが、教師の理想主義はほとんどすべてのばあい生徒と父兄の現実主義とくいちがうものである。一部生徒からの排斥運動などもおこって、二十七年七月退職上京する。四人の生徒が一緒に上京し、弟収二と六人での共同生活をはじめる。九月に国民新聞社に入り、十月には千代田艦に搭乗して日清戦争に従軍記者として出かけ、「愛弟通信」を紙上に掲げ、多くの読者をひきつけた。翌年三月はじめに帰還し、六月九日、日本橋釘店の医師佐々城本支の家での従軍記者慰労パーティに招かれて、その家の娘信子を知るわけである。

いま、独歩の詩として知られているものは、明治二十六年ころからすこしずつみられるが、詩作品がきわだって多くなるのは、明治三十年はじめからである。宮崎湖処子編のアンソロジー『抒情詩』の刊行されるのは、その年四月で、独歩は「独歩吟」二十二編をもってその集に参加した。代表作「山林に自由存す」の発表されたのも、その年二月である。

小説「たき火」、「星」の発表されたのも明治二十九年末で、「源叔父」の発表は三十年八月である。つまり、ごく概括的に言えば、信子とのいきさつがあってのち、独歩はほぼ明らかに文学者としてのコースを歩みはじめるのである。なお、〈独歩〉というペン・ネームをつかうようになるのも、『抒情詩』における「独歩吟」にはじまると、伝記作

者たちは調査している。

「我は如何にして小説家となりしか」によると、少年時代に自分は功名心が猛烈で将来は賢相名将ともなり、名を千歳に残すことのみをかんがえていて、文章家、小説家などというものは絶対に眼中になかった。ところがあるとき、自分の精神上に一大革命がおこって、〈我とは何ぞや〉という問題に触れて一変した。ナポレオンや豊太閤はふっとんで、カーライルやウォーズウォースに熱中するようになった、と言っている。

ここに言う精神上の〈一大革命〉がいつ、どうして起ったかは説明されていないが、佐伯時代にはすでに政治に関心が薄れはじめたことを語っているところからみても、信子と相知るよりは以前のことであるのは言うまでもない。前述の、東京専門学校入学と再入学の過程などにはまだ政治青年のおもかげが残っているが、二十三年に植村正久の麹町一番教会へ通いはじめるころからすでに転換がきざしはじめていたわけであろう。明治二十年前後はわが国ぜんたいが政治的に大きな転換期にさしかかっていて、明治十年代自由民権運動の挫折につれて藩閥政治の組織化が強化されはじめる時期でもあった。北村透谷や正岡子規が、おなじように政治から文学へ方向転換しはじめるのも明治二十年前後である。とくに独歩は薩長中心の明治政府の施政に絶対反対をとなえる急進主義思想をいだき、吉田松陰に傾倒していたから、政治への不信はしだいに昂まっていった。

『欺かざるの記』は、明治二十六年から三十年までの独歩の、事実、思想、感情の展開をたどるために欠くことのできぬものである。そのなかでとくに目立つのは、カーライルの〈シンセリティ〉の思想につよく影響され、あるいはそこを出発点として独歩じしんの思考を展開しはじめていることである。二十六年六月二十日の記には、すでにそれの自由な、そしてかなり柔軟に発展させた解釈がみられる。いままでそれを〈至誠〉と訳していたが、非なり。〈赤条々の大感情〉というのが真意である。〈アア赤条々の大感情の胸間に燃ゆるありて、爰に始めて真の疑問真のストラッグルは来る可く、真の信仰は来る可し。〉と書いている。八月二十五日には、〈「自然」なる観念が屢々彼に起るに至らば、彼は稍々進歩したるなり。之れ「シンセリティ」の入口にして遂に信仰の入口なり。〉とかいている。やがて、シンセリティに、〈真実〉なることばが宛てられ、〈全真〉ということばなどもかんがえるようになっている（二十七年四月十六日）。そして、従軍の心情にふれてもつぎのように書いている。〈吾何故に好みて軍艦に乗り込みて生死の間に突入するか。曰く吾を自然のうちに更生せしめんがた

めなり。更に言ひ換ゆれば愈々シンセリティなる自然の児とならんことのため也〉。つまり独歩は、カーライルのシンセリティの観念を自由に解釈しつつ、ついに自然と人間との媒体としてそれを活用するところまで、よく自家薬籠中のものとしたおもむきがある。

「山林に自由存す」は、独歩の詩のうちでもっとも重要な、彼の思想を表現しているものであるが、その原型もこの日記に早くからあらわれている。〈「山上に自由あり」の句（シルレル）実に我をして躍らしむ。〉――二十六年八月三十日――などからはじまって、二十七年五月十三日の詩稿などを経てずっと発展してゆく。〈山林自由の生活〉――三十年一月二十二日――への要求が、東洋的諦観的自然観へ行くのを避けえたのは、あのシンセリティの思想によって人間的なものへ結びつけられていたためとみることができるだろう。

いうまでもなく、『欺かざるの記』後半のもうひとつの巨きなテーマは、佐々城信子問題をめぐってである。

独歩にとっては、出生の秘密問題よりも、信子問題のほうがより巨きかったかもしれないと、私は前に書いた。独歩の文学活動が本格的に表現を得はじめるのは、信子との生活が終ってから後だとも書いた。

しかし、信子とのことを、そのまま材料にした小説というものはひとつもないのである。「おとづれ」「鎌倉夫人」「第三者」などが、信子との経験をもとにした作品とみられるものであるが、すべてそれらは、そのまま現実とはつながらないように屈折させたうえでつくられたはなしになっている。それゆえ、これらの作品の屈折のさせかたをもうひとつ複雑にすれば、「夫婦」などもこの系統の作品とみることができる。明治三十七年七月の『太陽』に発表された作品である。すでに、明治三十一年八月には、榎本治との結婚生活に入り、おちついて現実的に人生を処理する知恵を身につけはじめたものとみることができる。

坂本浩が注目しているところであるが、二十八年十一月から翌年六月頃までに独歩は、少年伝記叢書五冊の原稿を書きあげている。『アブラハム・リンコルン』『吉田松陰文』『横井小楠文』などは、信子失踪事件の動揺のなかで書きつがれていたわけである。『欺かざるの記』におけるその時期の懊悩煩悶ぶりからみれば、とうてい冷静に伝記原稿を書きつぐ余裕はなさそうにみえるが、坂本浩の言うように、〈この作品の中に独歩の生活の片影〉さえも反映していず、〈彼の筆致は一種の弾力をもって弾んでいる〉のである。

「運命論者」は、出生の秘密問題にからめて話題にされる作品で、同時に巧みな表題のつけかたにも関係して、独歩

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c